
東方想讓心

ニコウミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方想讓心

【Nコード】

N6880Z

【作者名】

ニコウミ

【あらすじ】

多分、普通の一般人で有ろう鷹島和樹、通称カズは高校生と言う職業を終え「さあ、明日から自宅を護るぞ」と言う立場にokかれていた

そんなクズ野郎にあるお仕事の紹介がきた

「ある家に住むだけの簡単な御仕事です」

「うさんくせEEEEEEEEEEEE」

そんな思いも笑い飛ばすかのように無理矢理契約してしまった和樹

のめのまえはまっくらになった

胡散臭いババア系美少女（笑）に言われるがまま着いていった先は
和樹にとって笑えない日常の始まりだった

突然修正を行う場合があります、そしてその修正で話が少し変わる可能性がございます、ご了承ください

プロローグ 修正済（前書き）

前書きと言っことで

作者は東方projectは一応プレイはしております

ただ二年前です（・・・）

この作品に最強やチートなどは敵のみに存在します

主人公は人にしたら少し強いくらいです

どのくらい強いかわねれば犬より強くて熊より弱いです

分かりづらい？

じゃあ子供より強くてボフサップより弱いです

つまりそう言うことです

東方projectの作品を書くのは初めてですが小説自体は初めてではないです

ではお楽しみください

修正しました

プロローグ 修正済

「笑えよ、ベジータ…」

雪がパラパラと降り続く真冬の夜、ある青年が茶色の封筒を片手に公園のベンチに佇んでいた

「誰がベジータよ」

その青年の隣には同じくらいの年の女性が寒そうに手を擦りながらジト目で青年を睨む

その女性は普通過ぎる青年とは真逆に周りより数倍もかけ離れた美貌、つまりはかなりの美人だ

綺麗な金髪にハーフ系の整った顔は幻想的な美しさを放っていた

「メリー、凄く驚くかも知れないんだが聞いてくれ…実は」

「落ちたんですね、分かります」

「……笑えよ、ベジータ」

「下等民族が…とでも言って欲しいの？現実を見なさいよ」

メリーと呼ばれた女性は青年が持っていた書類を奪うとパラパラめくり始めた

そして徐に溜め息をついた後すぐ隣にあるゴミ箱に興味が無さそうに投げ捨てた

「ちょっと七つくらいボール探してくる、探さないで」

そんなメリーを見た青年はウンザリしたように右手で顔を覆い息を吐きながら呟いた

そつ、この青年はただいま就活中で色々な会社の入社試験を受け回ったが

「ええ…最初は簡単に受かるなんて思い込んだ俺が馬鹿だった……
…30件も落ちるとさすがに希望が見えなくて命がマツハなだけ
ど…」

この青年、どこにも受からないのだから
しかも今日受けたこのクリスマススイブが記念すべき30件目なのであるさ

まさにクルシミマスイブ

「ちなみにどんな会社受けたのよ？」

「刺身の上にタンポポを乗せる工場だ」

「……あれはタンポポじゃないわよ……」

「え？」

「て言うかそれ手作業じゃないわよ……」

「ええ……？」

もはやなにも言えなくなった青年、和樹はそのまま横に倒れメリーの太ももに倒れる、所謂膝枕をいきなり断りもなくした和樹に対してメリーは溜め息をついた

「ちょっと！断りもなく女性にこんなことして……流石の貴方も落ち込んでるの？」

「ああ…ごめん…ちょっとだけ人の温もりが欲しい…」

頂垂れるように和樹は呟く

メリーはそんな和樹を見てなにも言えず、殴ろうとして中に浮かせていた手を和樹の頭に優しく落とした

本来、和樹と言う男がこのように人に素直に甘えるのは幼馴染みであるメリーが見ても始めてに近い行動だった

そんな和樹に渴を入れるつもりだったメリーは言葉に詰まりながら頭を撫でた

「それで、どうするの力ズ？」

「さっぱりだ……どうしようもない……」

「そう、まあ来年一月までに仕事が決まらなかったら私が雇ってあげるわよ」

そうメリーは少し顔を赤くしながら言った、確かにお嬢様なメリーなら使用人として一人くらい雇えるかも知れないが、それは男として幼馴染みに雇われるとかなんか情けない思いが来てしまう

「いや……なんか男として情けないとかそんなレベルじゃなくて泣きそう……」

「プライドなんか犬にでも食わせなさい、そして私に膝まずいて忠誠を近いながら惨めに靴を舐めなさい、そしたら餌をあげるわ」

「お前に雇われた未来が想像出来るんだが、光が見えない」

「あら？私の使用人は明るい未来しかないわ」

そう言いながらメリーはクスクス笑った

そんなメリーに苦笑いをしながら幾分か気持ちが落ち着いてきた、メリーはいつもこうなのだ

なんだかんだ言いながらしっかりと救ってくれる幼馴染み、神様が端正込めて作った人のように出来た女性

「メリー」

顔を見るのは恥ずかしいのか和樹はそのままの体制で呟いた

「なに？」

耳が赤くなっている和樹に少し笑いながらメリーは優しく問い掛けた、そんなメリーの問いかけにこう言う場面に慣れていない和樹はさらに恥ずかしくなってくる

「そのだな……」

「なによ？」

言いたいことは簡単なのだ

和樹と言う男は何時になってもメリーに助けられてばかりだと、それなのにろくに恩も返せない、なにもしてやれない、助けてやった記憶もあまりない、頼りっぱなしでまだまだメリーに甘えてる自分が少し嫌になって来て、それでも甘えてしまう自分がいて

「なに？和樹らしくないわ、はつきり言いなさいよ」

自分が言うことを分かつてる癖にニヤニヤ笑う幼馴染みにこんな弱い男が言えるのはありきたりな言葉しかない

「いつもありがとう…」

こんな事しか言えない馬鹿な男を気にかけてくれて、恥ずかしいからありがとうまでしか言えないけど

「あらあら、どういたしまして」

クスクス笑う幼馴染みの声を聞いてると嬉しくなる自分がいるんだ、恋心ではないし、友愛でもない、なんなのか分からないけど、今はお礼だけ、そしていつかこの助けて貰っている恩を

「…必ず返すから」

メリーに聞こえないように和樹は呟く、聞こえてるのが聞こえてないのか分からないが、メリーは和樹をまた撫でた

「……どっこい正一」

「あら？もういいの？今しか味わえないメリーさんの膝枕よ？」

「いきなり悪いな、もう大丈夫だと思う」

「……そう、じゃあ」

そう言つてメリーは携帯を和樹に見せる

画面には「クリスマス限定！ビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグ！いまなら三千円だ！お得ッウウ！」と言つ見出しに有り得ない形をしたハンバーグの写真

そしてヨダレが少し垂れた満面の笑みのメリーが不気味なオーラで和樹を見ている、否
睨んでいる

「奢りね」

「……………ええ？この空気でそう言つこと言つちやう普通？」

「あら？麗しき女性の太ももを貸してあげたのよ？見あつた代償でしょ？」

ああそうだ、昔からメリーとは素晴らしい女性だったなと和樹は呆れたように溜め息をついた

人間関係って必要だよな

メリーにとんでもないハンバーグを奢らされたクルシミマスイブから二日後

俺は家でのんびりしている日々を過ごしております

「もう泣いていいよね…」

もう誰でもいいから雇ってくれないかな、なんて考えていると突然チャイムが鳴った

そう言えばメリーが来るみたいなこと言ってたな

「すいません！！新聞の勧誘なんですけど！！」

どうやらまったく違うようだ…

「はいはい、ちょっと待ってください」

取り敢えず適当に断るかな

俺は玄関の前に立つと覗き穴からちょっと覗いてみた

「ついに文文。新聞現代デビューですよ……フヒヒ…」

なんかもの凄い美人が要るんだが関わっちゃいけない感がMAXなんだが

え？世の中にこんな美人がメリー以外にいたのか？取り敢えず

「ちよっ……ゲフンゲフン…御待たせしました」

「あやや…ダンディな声ですね、虫酸が走ります」

「え？」

「え？」

なんかいま初対面に対して有り得ない言葉が空耳したんだがどう言うことなの？

「ああすいません！つい本音が出てしまいました」

直球すぎワロタ

「すいません、お帰りください」

「お邪魔しますね」

「え？耳腐ってる？大丈夫？医者紹介するよ？」

「あやや、狭い部屋ですね」

あれ？目の前に居たはずなのにいつの間にか炬燵に入ってミカン向き始めたんだけど

あれ？確かにいま目の前に居たのに…

「何してるんですか、さつさと入ってきてくれないと契約の話がでないじゃねーですか」

「いや帰れよ、て言うか契約なんかしねーよ」

「いまならビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグの割引券挙げちゃいますよ？お得ッウー！」

「いやだから帰れよ、なに？ワンダフルケーキ型ハンバーグ流行ってるの？どう見たってあれ他店舗に差をつけるために開発した新商品だけど失敗しちゃってる形じゃねーか」

「さて契約の話ですけど」

「いやだから帰れよ」

「人の話は最後まで聞けって教わりませんでしたか？屑が」

初対面に対してここまで言うとかもう美少女にはなんか性格が破滅してしまう呪いでもかかっているんじゃないか

取り敢えず炬燵に入ってみる

「あ、足は伸ばさないで下さいね、私が伸ばしますんで」

「喧嘩売ってる？」

「新聞売ってます」ドヤア

いや上手くねーよ、逆にイライラが増したわ

目の前の美人さんは思いつきり足をのばして俺の足を蹴った

「もうちょい向こうに行ってくださいよ、足当たってます」

「分かった、喧嘩売ってるね、よし、表に出るよ、血を見せてやる」

「あ、私は文と申します、名字は教えません、教えたくないんで」

「駄目だこいつ、早くなんとかしないと…」

そう言う文は突然持っていた鞆から新聞らしき物を取りだし炬燵に無造作に投げつけた
コイツ契約させる気ねえだろ

「ぶんぶん…新聞」

「。の所は丸と読んでください」

「今まで聞いたことない新聞だな、知名度無いんだな…」

「え？文文。新聞知らないんですか？え……？」

「え？いやいや、知らない……よな？一般的に有名じゃないだろ」

「ええ…マジで言ってるんですか？」

あれ？引かれてる？え？この新聞って一般常識なの？

……

「ああ、うん、思い出したわ、文。ね、うん、有名だよ、知ってる知ってる」

「ですよ、ああビックリしました、まさか知らない人がいるんだあーなんて思っちゃいましたよ」

そう言つて文はホツとしたように笑つ、え？そんな有名な新聞なの？

いや、確かにここ一年くらいテレビ見てないし、最近有名になつたんだ…

これは俺だけクラスの話についていけなくてそこで会得した・シツタカブリ・を使うときがきたな

「実はこの家が家の新聞を契約してないことを知りまして編集長である私がここに来たんですよ」

編集長来ちゃったよ！？

え！？編集長来ちゃうくらい常識な新聞なの！？
就活において実は常識と言うのはかなり重要視されるのだ
ここまで有名な新聞ならその情報は確実だろう

「あ、ああ、うん、そう言えば契約しようかなあなんて思ってたんですよ、はい」

「あやや、馬鹿ですね……」

「え？」

「いえいえ！ささつこの契約書にささつと書きちゃってください！
！」

文から渡された紙に目を通して見る
生年月日に性別に興味に性癖に好みのタイプから

「これが今流行りの新聞なのか……？いや、なんか爺みたいなこと言うけど最近の流行りは分からねえ……」ま
ままあ取り敢えず書いとくかな

「性癖は足……ちょっと足伸ばすの辞めるんで伸ばしても良いですよ」

「くっ……性癖書くのに意味はあるのか!？」

「とかいいつつ用紙にビツシリ書いてますね」

「足、太ももの愛なら負けないんだ」

「……………」

「ごめん、さすがにそんなゴミを見る目は傷付く」

そんなこと言っている間に用紙に書き込みは終わり、用紙を文に渡した

文その用紙を鞆にしまい込むともう一枚の紙を出した

「来週から新聞を届けます、お楽しみにしてくださいね」

「ああ、うん、有名だもんね、タノシミダナア（棒）」

「では帰りますね」

あれ？今まで目の前に居たはずなのに聞こえてくるのは後ろから、つまり玄関から聞こえてくる
確かにいま目の前に居たはずなのに

「あるえー？」

ガチャツと言う音と共に玄関が閉まる音が聞こえてくる

「スタンド攻撃？」

+++++

「いま思えばあれ騙されたんじゃない？」

冷静になって見た、ちよつと友達に「俺ってさあ文文。新聞の契約してなかったんだよねwwwwwwうえwwwうえwww」って言ったんだよ

うん、普通に引かれた

「あのクソ記者めえ……」

「いや私に言われても困るんですが…」と言うか普通は騙されませんよ

「早苗が反抗期だぞ諏訪子」

「私達には反抗しないからいいのさ」

そして何を隠そうか後輩であるこの早苗に引かれたのだ

同じ学校で注目を浴びていた俺【悪い意味で】と注目を同じく浴びていた早苗【いい意味で】は何故かメリー繋がりで仲良くなった

今では早苗の家である神社に泊まったり飯食ったりと中々仲良くさせて貰っている

「相変わらずカズは馬鹿だな」

そしてのほほんと笑うこのロリは早苗の従姉妹らしい諏訪子だ、身体は小さいが早苗より年上とか

まあ可哀想に、需要はあるからいいんじゃないかな

「カズ？その目は気に入らないなあ」

「諏訪子、その小さな身体のどこにゴリラみたいな握力がアアアアアアアアアア！？すいませんごめんなさいもう考えませんから離してエエエエエエエエエエエエッ！？」

「諏訪子様、その辺にしないと部屋が汚れます」

「ああ、ごめんよ早苗」

駄目だコイツら、人の心配とかそんなこと一切考えてねえ奴らだよ

「それで先輩はここに何しに来たんですか」

「おいおい友達の家に来たら1つ、遊びにきたに決まってるだろ」
k

「就活はどうしたんですか就活は」

「ああ…来年から本気出す」

「大変だ早苗、ニートだよ、写真撮っていい？」

「しょうがないですね、特別ですよ」

キラキラした瞳で諏訪子は早苗を見つめる

そして早苗は無表情で鼻血をスプラッシュしながらシャッターを一回押した後諏訪子に渡した

なに然り気無く諏訪子を一枚納めてるんだこのロリコン…

駄目だこのロリコン…手遅れだ…

「ニートだ」パシャ

「ニートですよ諏訪子様」パシャ

「……………ニートジャナイモン……………」

「始めてみるよ」パシャ

「あまり見かけない屑ですからね」パシヤ

「……グスッ……ニートジャナイモン……」

「沢山いたら困るからね」パシヤ

「そうですね」パシヤ

「ヒック……ニートジャ……グスッ……」

「カズが沢山いたら困るからね」パシヤ

「考えられませんね」パシヤ

「ウエエ……ニートジャナイモン……グスッ」

泣かないもん……ニートじゃないから泣かないもん

写真に飽きたのか諏訪子はカメラをテーブルに置いてテレビを見始めた

「なんなの？新手的虐めなの？ニートの何が悪いの？」

「いや、ニートはもう悪いところしかないですよね」

「ですよー」

いや分かってるんだよ、だけど働けないこの辛さを分かって欲しいね

「……まあ先輩が路頭に迷うのも見ておけないですし、家なら、

まあ…人手不足と言うか…」

取り敢えず寒いんだがこの神社にある炬燵は三角形の形なのだ、早苗と諏訪子とまあ一人昼寝しているので入れないのだ

「諏訪子、炬燵に入らせろよ」

「もう一人くらい働く人が欲しいなあなんで、その、まあ、給料は少ないですけど、まあ住み込みも」

「やだよ、テレビが見れないじゃないか」

「じゃあ膝に乗れよ」

諏訪子を無理矢理膝に乗せて炬燵に入り込む

「住み込みだからって、あれですよ？諏訪子様達の部屋に侵入なんか殺しますよ？ただ、まあ……我慢できないなら私の部屋に…」

「むう………簡単に女性を膝に乗せちゃ駄目だよカズ」

「安心しろ、簡単に乗せないから」

そう言うつと諏訪子顔を赤くしながら納得がいかないようにテレビを見始めた

しかし最近はず過ぎだろう、ちょっと可笑しいんじゃないかね

「地球の未来が不安だねえ」

「爺臭いね」

「あれですよ？決して私が先輩をとかそんなんじゃないですね、諏訪子様達の心配であって」

しかし暇だな、神社と言っても27日とかなら暇なんだな…神奈子は寝てるし、やることがないな

「しかしどうするんだい？就職が決まらなかったらニート？」

「ですからね、1月の初めから住み込みなんですけど手続きとか…」

「まあ就職は最終手段はメリーの使用人…」

「メリーさんの使用人……………」

なんか知らないけど早苗様がむっちゃ怒ってる…

俺は鈍感じゃないんだ、コイツらのデレが難しいんだ（前書き）

12月24日、早苗の会話を修正しました

俺は鈍感じゃないんだ、コイツらのデレが難しいんだ

「んで、なんでメリーがここにいるのさ？」

「それは私が聞きたいわ、早苗に突然呼ばれたのよ」

神奈子がやっと目覚め、何故か分かんが早苗がメリーを突然呼び出し呼び出して置いて自分は俺を睨みながら飯を作り始めた

うん、改めて意味がわからない

「それで、さつきから諏訪子を膝に座らせているカズはなにか知ってるの？」

「いや、全く……あれ？なんで二人して睨むの？」

何故か神奈子とメリーに呆れたように見られる
分かんが取り敢えず俺が悪いのか？

「カズは決して鈍感じゃないわ、ただ馬鹿なのよ」

「そうだな、カズキは馬鹿だ」

「そうだね、馬鹿だね」

「え？何が？俺が悪いのか？なんなの？友達の家遊びに来たら馬鹿にしかされないんだけど……」

泣きかけてる俺を他所に三人は何故か疲れたように呆れたように溜

め息をついた

メリーなんかどうしようもない目を向けてくる

え？なんなの？

「まあこれなら簡単に奪われないって安心があるからいいんじゃないかな」

そんな事を呟きながら諏訪子は俺に頂垂れてきた

こう見ると本当に年上なのか疑わしいが身内である早苗が敬語を使うくらいなんだからそうなんだろうな

「まあ私にはどうでもいいけどね」

呟きながら神奈子は炬燵に潜り込んだ

そんな神奈子を見たメリーは一息ついた後同じく炬燵に潜り込んだ

こんな時出来る男なら料理でも作るんだろうが生憎料理なぞ作れないスクランブルエッグくらいなら出来るぜ

「炬燵で暖まってるのとこ悪いですが、ご飯出来ましたよ」

ぬくぬくしている中、後ろの部屋から早苗の声が聞こえてくる

何時もなら三人でこの炬燵で飯を食べるのだろうが今は五人、後ろの部屋にあるテーブルじゃなきゃ食べられないのだ

「先輩、ちょっとどいてください」

と早苗はお盆に二人文のご飯を入れ運んできた

「ん？なんで二人？」

「私とメリーさんは此方で食べますので」

とささつとメリーの場所と俺がいた場所に料理を並べてしまった

「え？いや、みんなで向こう…」

「先輩」

「と知らない！ああ！なんか今は三人で食べたい気分だなあー！？」

諏訪子と神奈子の手を掴んで後ろの部屋にヘッドスライディングッ！
そしてとある有名旅館の女将もビックリの音をならさずに扉を素早くかつ丁寧な占める

「こ、この俺が恐怖を感じている…ッ！？……ばっ馬鹿なッ！？この和樹が恐怖を感じているのかッ！？」

「伝わりにくいネタはやめて早く食べないと覚めちゃうよ」

「今日の献立はビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグだ、お得だな」

え？ワンダフル流行ってんの？

+++++

「それで何かしら？」

和樹達が騒いでいる部屋を後ろに二人の女性、いや生温い二人の女豹がご飯を黙々とたべていた

「先輩が路頭に迷いそうですね」

「？そうね、さすがに幼馴染みがニートは困るわね」

「

突然話を始める早苗にメリーは不思議そうに答える
そんなメリーに早苗は笑いながら言った

「もし先輩が路頭に迷うなら先輩は家で雇うんで安心してください」

「ふうん……」

今！二人の女豹は壮絶な心理戦を繰り広げています！暫しお待ちください！！

「……………」

「……………」

凄い心理戦だ……………ッ…踏み込む余裕がない…

「……………」

尺稼ぎじゃないですよ!!

「……ふうん、でもこんなの言うのもなんだけど給料低いんじゃない？あんな奴でも家なら雇えるわ、むりしなくていいのよ？」

語尾を強調しながらニコツとイイエガオでメリーは言う、そんなメリーに対して早苗はイイエガオで答えた

「……いえいえ！確かに給料と言う事に置いては少ないですけど先輩一人ならなんとかありますのでメリーさんは安心してください！」

つまり給料とか誤魔化せばなんとかなんだよ！いいから黙って先輩をこっちに渡せ！！と言葉の後ろに隠れているのはメリーにとって簡単に理解した

「…そうなの！でも和樹は早苗の所は選ぶかしら？あ、別に和樹が早苗を嫌ってるとかじゃないのよ？ただ……友達より幼馴染みにたよるんじゃないかなあって思うの」

つまり貴様の好感度じゃ和樹はなびかねえんだよ、断れるんだから最初から誘わない方が幸せだぜ？と言葉の後ろに隠れているのは早苗にとって簡単に理解した

「ああそうですね、でも！諏訪子様や神奈子様と馴染みの友達と一緒に働くってのは働くってことにちよつと怯えてる先輩は楽な仕事場になりますよね？」

つまりこっちは一緒に働くのは先輩にとって中の良い友達しかいない仕事場になるんだぜ？仲良く楽しくを好む先輩はどう考えたってこっちを選ぶに決まってるんだろ」
と言葉の後ろに隠れているのはメリーにとって簡単に理解した

「ふうん…でもその辺は大丈夫よ、和樹を雇ったらず間違いない私の護衛みたいな役になるから、幼馴染みと一緒にの仕事場になるのかしら、和樹は友達と幼馴染み、どちらに安心するかしら？」

つまりその辺は抜かりねえんだよ牛乳がッ！！いいからさつさと諦めるよタコが

と言葉の後ろに隠れているのは早苗にとって簡単に理解した

「へえ、じゃあ殆ど同じ条件なんですね」

「そうね、全く…私達に迷惑をかけているのを力ズは理解してるのかしらね」

「そうですね、先輩ったら仕方のない男ですから」

「そうね、全く同感だわ」

そう良いながら二人は笑い合う

決して仲が悪い二人ではないのだ
ただ女性の勝負に友情など無縁なのだ

「クリスマスだってのに先輩は独り身ですし、可哀想ですね」

「そうね、と言いかむしろあの男に惚れる女性が居るわけないわよ」

「それもそうですよね」

惚れている二人の女性は笑い合う
底知れぬオーラを放ちながら

+++++

「酷くない……俺だって頑張ってたよ……俺だってさあ……」

「ああ……うん、カズ、来年は良いことあるよ」

勿論隣の部屋は襖一枚じゃ声など遮れずに会話は全て和樹の耳に入っていた

物語は急速として訳の分からない展開になる

日が落ち始め、赤色の夕暮れに照される自分の部屋をなにも考えずに見ていた

お世辞にも広いとは言えない部屋にテーブルが一つ、そして俺の向かいには幻想的な美しさを放つ幼馴染みに良く似た女性

しかし似ているのは外見だけで

「貴方の選択肢は2つ」

目の前の女性の声は透き通るように　そして脳に叩きつけるようによく聞こえてくる

その声もそっくりで、俺に語りかけてくる

「見捨てるか…見捨てないか」

まるで意味を感じさせない微笑みで俺を見つめて問い掛けてくる

それだけで、似ていると言うだけで、無意味に頷いてしまいそうな自分を止められなかった

答えなんか出せなかったんだ　俺は彼女を救いたいー

なんでこんな状況になってるか、少し落ち着くために思い出してみようか

あれは何日間か前だ、ある女性から突然来た電話から始まった

+++++

『久しぶりね〜元気にしてる?』

「なんですか、今夜中の一時ですよ?金は貸せないのでからね?」

『……あんたが私を見ている目がどんなものか分かったわ』

少し怒気を含ませた声にハハッと笑い返す

それもそうだろう、この人の電話は毎回毎回良い思い出がないのだ

「なんですか蓮子さん?無人島にフレッシウーマンでも探しに行くのなら断ります」

『そう言うのではないわよ、安心なさい』

「じゃあ雪男?」

『……まず藤岡〇探検隊から離れなさい、今回は違っわよ』

「ああ、じゃあ失われたアトランティスとかですか」

『ぶっ飛ばすわよ』

「すみません冗談です」

トーンが低い声に隙いれず謝る、この人は怒るとメリー並みに怖いのだ……

電話の相手は宇佐美蓮子始めて会った時に「軽いDQNネーム……?」

と呟いてビール瓶で殴られた
どこのマフィア映画だと、思わず突っ込む前に頭から血がスプラッシュして意識が消えた

あの時は酔っていたとかほざいたがどんな悪酔いだと数時間は説教したい

『ちよつと今から会いたいんだけど会えるかしら？』

「はい？蓮子さん今は東京じゃ？」

『今は京都駅よ、ちよつと急用なの』

「はあ……？あれ？でも来年まで帰ってこないって言ってますでした？」

そう言えば後ろからガヤガヤと聞こえてくる、今駅にいるのかえ？今夜中の一時に駅にいるのか？そんな急用？

『のんびりと休養する暇もなく急用が入ったのよ』

「寒……………」

『駄洒落じゃないわよ！？』

休養してる時に急用、うん、上手くないね、そんな話をしている合間にホームで聞こえる高い音は聞こえなくなつた、外にでたのか？やけに急いでるな

『ああやっぱバスないわね』

「タクシーならあるんじゃないですか？」

『お金がないわ』

「貸さないですよ」

『安心なさい、ニートに借りるほど落ちぢやないわ』

ああ、教えたのはまず間違いなくメリーしかない、教えちゃ駄目な人に真っ先に教えやがって

「さよなら」

『和樹』

なんだ？なんか異様に焦っているのが手に取るように分かる、掴みにくい蓮子さんにしたらかなり珍しい雰囲気はこちらも無意識に構えてしまう

「…そこまで急ぐんですか？」

『そうね、こんな無駄話してる暇が無いくらいに』

これは、ふざけてる場合じゃない雰囲気だな

俺は立ち上がりバイクの鍵を取り長ら寝間着だった服を脱ぎ捨てる

「一時間くらいで行きます」

『ありがとっ…急いで欲しいけど事故らないでね』

「分かってます、切りますよ」

相手の返事も聞かずに携帯を畳む、ダウンを着込み部屋の戸締まりを確認せずに飛び出る

「たく…」

絶対にただ事じゃない、蓮子さんが彼処までなっているのはメリーならいざ知れず、高校からの付き合いである俺は見たことがない

あの人からかかってくる電話はいつも平和じゃないんだ…嫌になってくる、たまには愛でも囁いて貰ってもバチは当たらないよな？

「雪降つとるし……そっぴやメリーが今日は降るって言ってたな」

急いで玄関を閉めて階段をかけおろる

今更ながら12階なのにエレベーターがないとは製作者は馬鹿なのではないのか

一階に降りた先に駐車場に置いてあるバイクに向かう、シートを取り上げるとそこに現れたのは無骨な黒のデザインにカスタマイズされた車体

エンジンは特注品と言う有り得ないくらい金がかかった中型バイク

、まあ、これはメリー繋がりで破格の値段で…

「んなこと思ってる場合じゃねえな」

シートを丸めて端に投げると鍵を差し込みエンジンをかけた

夜中には迷惑なエンジン音が響く

近所の“就寝中”の皆様！！“就活中”の私目が迷惑をかけて申し訳ありません！！（ゝ・ゝ）テヘペロ

「……いや……伝わりにくい上に駄洒落になってないな……」

アホやってないでさっさと行こう

アクセルを握った瞬間にまた携帯がなり始める
今から行こうと言うのに……

一回エンジンを切ったあと携帯を開くと蓮子さんと画面に表示された

「なん……」

『ひよわあああああああああッ！？』

一瞬だけあまりの音量に携帯を耳から離し思わず携帯を落としそう
になり慌てて強く握り直す

『か、和樹！？一時間と言わず今すぐ来てええ！？』

「れ、蓮子さん！？どうしたんですか！？」

今まで聞いたことがない悲鳴に急いで聞き返す

『大ピンチ！！追い付かれたのよ！？私に戦う能力はないのよ！！』

「ちよっ！蓮子さん！？落ち着いてッ！！今どこに…」

『ひゃあ！？ちよっ…ッ…放しなさいよッ…！』

突然ドサツと音が聞こえてくる、そして携帯からは何かを落としたような大きめの音が聞こえてくる

『携帯落とした！！集合場所は…二人の思い出…よ！』

遠くから携帯越しに蓮子さんの声が聞こえる、そのあと何人かの足音が聞こえてきた後、携帯からは無音しか聞こえてこない

ヤバい、これは何か知らんがかなりヤバいぞ

「蓮子さん！おい！？蓮子さん！？だあッ！！もうッ！！なんであの人はいつも！」

急いでエンジンをかけてアクセルを思いっきり捻る、この際信号とかスピードとか守ってる余裕は無い

「前科とか絶対就活に響くじゃねえか…くだらない理由だったら怒鳴ってやるからなアッ！」

無事でいてくださいよッ……

+++++

「なんなのよチャイナコスプレ変態女っ！？」

「なっ！？なあッ！？この服装は中国でれっきとした私服です！」

「何時の時代よッ！？日本語ペラペラな癖に中国気取り！？誤魔化し下手くそすぎでしょ！！」

人気の無い夜の道、大通りだと言うのに全く持って人一人いない、不気味な雰囲気を放っている

そしてその道を三人の女性が走っていた

一人は特徴的な帽子を被って肩ぐらいまでのショートヘアの綺麗な女性　宇佐美蓮子がリュックを背負いながら走っていた

そしてその蓮子を追いかけるようにメイド服を着た女性とチャイナドレスを着た女性が追いかけるように走っていた

「美鈴！もう少し速く走りなさい」

「無理言わないでくださいよ！？現代ってなんか上手く走れないんですよ！妖力も使えないですし！！なんなんですか現代って！」

蓮子と思う、なんだあの見るからに危ない関わりたくない二人は現在進行形で私を追いかけている

この構図を知り合いに見られたら最悪だ

「なんか無用にあの女性速くないですか！？明らかに運動不足丸分かりの女性なはずなのに！」

「五月蠅いわね！？運動不足じゃなくて運動しないだけなのよ！！」

「太った女性が何時でも痩せられるみたいな言い方ですね」

「五月蠅いわね！？追い付けないからって嫌味言わないでくれる！」

「太ったに反応しましたよ、あれ氣にしますね」

「確かにちょっと気持ちふっくらしてるわね」

このまま止まってぶん殴ってやろうかと蓮子は思う、ただあの二人は見た目に反して有り得ないくらい強いのだ
自分を助けるために駅に居た警察四人を十秒とかからず気絶させた、あれで本調子ではないと言うのは会話から分かる

つまり自分が行ったらまず間違いなく捕まるのだ

「ハアッ……き、キツイ!!」

こんな事なら普段から運動をしとけば良かったかなんて思う、我がサークルの運動は和樹がいつもやっていたのだ

「疲れが出てるわ、あと少しよ」

確かに厳しくなってきた、息も厳しくなってきたし足もプルプルしてきた、残念ながら私の足は細くて美しくて綺麗過ぎるかわりに筋肉などないのだ

プルプルつの可愛い足なのだ

「き、キツイい！……あ、あの馬鹿はまだなの！?……」

「あの馬鹿？」

「や、ヤバい！我ながら…馬鹿言ったあ！」

メイド服の女性が感づいたらしい、それはそうか
我ながら何回も和樹の事を言ってしまった

いやだってさ、私だって女の子だしさ、男の子に助けを求めたって
いいじゃない？いいわよね？

「美鈴、多分彼女は助けを呼んだみたいだわ」

「さっきの独り言ですか？そう言う能力ですかね？」

「それは分からないけど、彼女の独り言は私達が男達を倒した後ね
……つまり」

ヤバい、なんか全部が全部バレちゃった？いやまあ隠してた所であ
んま意味はないだろうけど

「でも大丈夫そうですよ、彼女はもう走れなくなります」

「な、なんなのあの体力馬鹿達！？……きつつい…ハアツ…」

初めは数百メートル放れていた距離が段々と近くなって来ている、
しかも高速道路なのに車が一切走ってないと言う異常な光景
どこの魔術ですか？
しかも追いかけてきている二人のペースは全く変わらない
どこの幕の内ですか？

「は、走れない…ッ……きつつい！」

もう後ろを向く余裕なんか無い、と言つかすぐ後ろに来て手を伸ばしている

「…………い、いやッ…………」

触れた、どちらかの手が帽子に触れた

「かず…ハアッ…………和樹っ…」

そして次の瞬間、肩を捕まれた

「なあ！？い、いやア！」

そしてチャイナ娘に羽交い締めにされた
捕まった、完璧に捕まってしまった

「ふん！」

もがいてもびくともしないチャイナ娘の足を思いつきり踏んでみた

「いつ！？ちよつと痛いです！……っつー！」

「ちよつ…ハアッ…微動だにしないって…女性としてどうなの……？」

「さて少し静かにして貰いますよ」

そう言いながらメイド服の女性は突然どこからともなくナイフを取

り出した

「へえ！？ちよつと、嘘でしょ……？」

「安心してください」

「い、いや……」

ゆつくりと少しづつこちらを歩いてくるメイド女はナイフを手でクルクル回しながら弄ぶ

「か……和樹……」

「あ、あはは……これ完璧に私達患者ですね」

後ろの女は笑う、今の私にはそれも怖くて、なんか周りの暗闇も怖くて、上手く考えられない

「和樹っ……和樹！」

いつもこんな怖い時はあの馬鹿が近くでへらへら笑ってる癖に、今は居ない

自然と私は和樹の名を読んでいた

「この馬鹿……いつも居なくて良い時に居るくせに！」

さっき助けを呼んだのが和樹だからなのか

私が無意識に和樹に助けて貰いたいのがよく分からないけど

「今私は凄く怖いのだよ！速く、速く来なさいよクソニート！」

メイド女がナイフを構えた時とつさに目をつぶってしまった、ああ
なんな、最後にもしかして凄く恥ずかしいこと叫んじやったわね、
なんて思った

「…あ、あれ？」

刺されるって案外痛くないのかと疑問に思いながら目を開けると、
メイド女の後ろ姿が目についた、よく見れば私を拘束しているチャ
イナ娘もこちらではなく前を睨んでいた

私は釣られるように前を見た

「あなたが援軍かしら？」

「ああ、援軍だな」

そこには無造作に転がったバイクと今まで見たことの無いような表
情を浮かべた友達がフルフェイスを取りながら立っていた

「そのナイフで何するつもりだったんだ？」

フルフェイスを地面に投げつけてうつ向いていた顔をあげた

「か、和……樹？」

その表情は、見て分かった

あれは完璧にぶちギレてる和樹だ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6880z/>

東方想讓心

2011年12月25日23時45分発行